



あしたの 子どもたちへ

~アートとともに~



はじめに

子どもの表現や発想の豊かさは、
無限であると感じます。

だからこそ、子どもが様々な人や環境、素材と出会い、
その豊かな発想をかたちや動きにしていく時間が大切です。

アートは、
日々の生活や遊びの中から生まれることも多いです。

日常の何気ない一瞬の出来事が、
子どもにとっては大きな発見や出会いとなり、
新たな表現の源となることもあります。

子どもの表現のひとつひとつが未来をつくる種であると考えたとき、
その種を豊かな土壌の中で育んでいくことが大切です。

本書では、子どもの豊かな育ちを願い、
感性や創造力を育んでいくことを目的に取り組んでいる
保育実践やワークショップの事例を紹介します。

家庭や園・学校、社会の中で、
アートと子どもをつなぐ取り組みが、
一層広がっていくことを願っています。

もくじ

- 02 はじめに
- 03 研究の目的
- 05 子どもたちが夢や願いを叶える保育
長崎ばんぽん保育園
- 07 ふじのくに子ども芸術大学
- 09 茅ヶ崎市美術館 企画展「美術館まで(から)つづく道」
フィールドワークショップ
「みちの音を摘み取る」

- 11 こどもアートワークショップ×カンファレンス
こどもとアートをつなぐワークショップとは
- 13 みんなでつくる“ひとつの舞台”のようなワークショップ
ワークショップサークス
- 15 NEW CREATIVE VIEW
金箱研究室訪問
デザイン・クリエイティブセンター神戸(KIITO)
- 17 おわりに
研究メンバー詳細

研究の目的

人口減少や少子高齢化、高度情報化社会の進行などに伴い、家庭や地域社会の在り方も大きく変化しています。この変化に向き合うためには、未来を生きる子どもたちを社会全体で育てていこうとする考え方が必要であるといえます。中でも、子どもたちの感性や創造性を豊かに育むアートの視点は、地域社会づくりに不可欠であると考えます。本研究では、アートに関わる研究メンバーが、それぞれの専門分野や経験を活かしながらアートを通じて、地域の産業、文化、教育などの振興と発展に寄与していくことを目指しています。子どもたちが、多様なアートプログラムの体験をすることにより、改めて人や資源に気づき、よりよい地域社会を創造していこうとする人材育成を志向していくことが本研究の目的です。



メンバー

本研究メンバー4名は、アートや美術教育に携わっている共通点を持ちながらも、それぞれに異なる立場や視点を持っています。

藤田は、保育者養成系大学の教員として、幼児教育や初等教育における造形活動の意義や価値について研究を行っています。坂田は、静岡県立美術館副館長を務め、静岡県の文化芸術振興に携わり、現在は、アートと地域をつなぐ市民団体「アルテ・プラーサ」の代表として、研究会や講演会の企画・運営に取り組んでいます。青木は、浜松市のクリエイティブスペース「鴨江アートセンター」の副館長を務め、アーティストの支援や市民とアートの交流の場づくりに貢献し2006年から「こどもアートスタジオプロジェクト」を主宰し、コミュニティアートの実践的研究に取り組んでいます。齋藤は、公益法人静岡県文化財団にて文化情報を担当し、県内のアート団体などの活動と連携とともに団体を支える取り組みを推進し、実践的な調査・研究を目指しています。

内容

01 定例研究会

研究メンバーが綿密な連携を図りながら課題や情報を共有していくため、令和元年度は8回の定例研究会を開催しました。

02 事例の観察

本研究では、地域で実施されているアート活動、メディアを取り入れた先進的なアートプログラム、幼児教育や保育の現場での実践を調査しました。本書では、これらの調査から得られたアートを通した人材育成の事例を取り上げ、活動に関わるエピソードと共に紹介します。

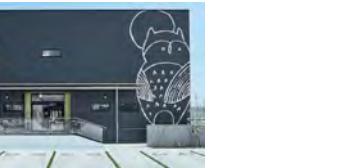


- | | |
|-----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 第1回 | [日時] 2019.5/24(金)
[場所] 静岡県立大学 小鹿キャンパス 教育棟6階 618教員室
[議題] 2019年度の研究計画の確認 他 |
| 第2回 | [日時] 2019.6/28(金)
[場所] 静岡県立大学 小鹿キャンパス 教育棟6階 618教員室
[議題] 神戸芸術工科大学・金箱研究室との交流内容・日程詳細 他 |
| 第3回 | [日時] 2019.8/2(金)
[場所] 静岡県立大学 小鹿キャンパス 教育棟6階 618教員室
[議題] 「ふじのくに子ども芸術大学」のプログラム参観について 他 |
| 第4回 | [日時] 2019.9/27(金)
[場所] 静岡県立大学 小鹿キャンパス 教育棟6階 618教員室
[議題] 研究報告書の作成について、「ワークショップカンファレンス」の振り返り 他 |
| 第5回 | [日時] 2019.10/11(金)
[場所] 長崎ぽんぽん保育園
[議題] アートを軸とした保育実践について意見交流 他 |
| 第6回 | [日時] 2019.10/23(水)
[場所] 静岡県立大学 小鹿キャンパス 教育棟6階 618教員室
[議題] 「ぽんぽん保育園」について 他 |
| 第7回 | [日時] ①2019.12/5(木)
②2019.12/6(金)
[場所] ①ホテルサンルートソプラ神戸
②神戸芸術工科大学、デザイン・クリエイティブセンター神戸
[議題] 報告書の制作等について、神戸芸術工科大学金箱研究室での意見交換、デザイン・クリエイティブセンター神戸の視察 他 |
| 第8回 | [日時] 2019.12/19(木)
[場所] 静岡県立大学 小鹿キャンパス 教育棟6階 618教員室
[議題] 報告書のレイアウト確定及び執筆内容の確認、神戸視察の振り返り、次年度以降の研究計画について 他 |



子どもたちが 夢や願いを叶える保育

長崎ぽんぽん保育園（静岡県静岡市）



長崎ぽんぽん保育園では、「人の幸せを考える力を形成する」という理念の下、家庭的で温かい雰囲気の中で、子どものありのままを認め、ひとりひとりの個性を大切にする保育を展開しています。日々の生活や遊びで、子どもたちが夢中になっていることや発見したことに対して、保育者は温かい眼差しを持って寄り添い、子どもたちが好奇心を持って自ら考え行動する姿を支援されています。

子どもたちの「やってみたい」という夢や願いを叶えられるように、保育室にはさまざまな素材や道具が用意されています。そして保育者は、子どもたちが没頭できる空間について話し合いを重ねながらつくりあげ、つくり変えていきます。子どもたちの思いを受け止めてくれる大人の存在と、表現する喜びを思う存分味わうことができる環境によって、子どもたちは新しい価値と出会い、心豊かに成長していくことができます。

施設概要

[定員]
90人(0歳 12人、1歳 15人、2歳 15人
3歳 16人、5歳 16人)

[場所]
静岡市清水区長崎新田191-1

[開園時間]
月～金曜日 7:00～19:00
土曜日 7:00～18:00



長崎
ぽんぽん保育園
<https://www.ponpon-hoiku.com/>



園内には日々の教育的プロセスを主体的に取り組む
子どもたちの姿が掲示されています。



01 あたりまえ

どこに描いてもいい空間が園内に存在します。
混ぜて描いて塗って…なんでもどこでもキャンバスになり、絵の具と子どもと笑い声があり、
その空間もアートになります。



02 ねえ、スカート作りたい

「作りたい」と思った時に、すぐに活動できる環境が保育室にあります。子どもの思いと道具の間に保育者が橋渡しをし、互いの思いを交差させながら、完成までの過程を様々な感情と共に経験していきます。



03 色とは

ガラス窓から差し込む光を通して、床に映る色や形を全身で捉えようとしているのでしょうか。こんな姿に立ち会えるのは、日常的にそこに色があるからです。



04 真剣

五感を駆使し、脳と指先をつなげ、真剣な表情で一点に集中している姿です。素材がなんであれ、楽しむ方法は無限にあり、それを見つけていく力が備わっていっているようです。





ふじのくに 子ども芸術大学

ふじのくに子ども芸術大学では、静岡県内の小中学生が自分の手を動かし、頭を使って作品を創りだす面白さを体験してもらおうと、アーティストなどが講師となって、音楽、美術、演劇、ダンス、文学、伝統芸能などの体験型講座を開催しています。

静岡県が地域の文化芸術団体の企画・提案を支援し、2011年から県内各地で継続して開催している講座です。

小中学生が芸術に好奇心や関心を持ち、アーティストに関わることで、感性や創造力を發揮できる魅力的な機会です。2019年に開催された「ふじのくに子ども芸術大学」の中から、特別講座と東・中・西部の各講座を参観しました。

講座では、「自主性」「独創性」「創造性」「子ども性」などを引きだすことに加え、講師の寄り添い方で、子どもが自分自身と向き合うことができる取り組みを大切にしています。

また、体験を通じ、芸術への関心を高めることを意図した講座もあり、今後の展開が期待されます。



ふじのくに子ども芸術大学
2019年講座一覧
<https://www.fkac.jp/kouza2019/index.html>

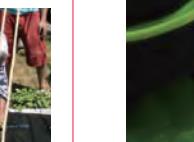
01 Tシャツに朝顔が咲いたあ～! あさってあさがお 明後日朝顔プロジェクト 朝顔の絵のTシャツを作つて出かけよう

朝顔の種が人と人、人と地域、地域と地域をつなぐ～明後日朝顔プロジェクト～は、定員を超える小中学生が参加した大人気の講座です。簡単すぎないかと思うほどの説明で活動がスタートし、講師は、子どもの姿を見守ります。自主性や独創性を大切にしたワークショップでは、小中学生は、気持ちが解き放たれたように作品づくりに没頭していました。

「明後日朝顔プロジェクト」とは

2003年「大地の芸術祭 越後妻有トレンナーレ」にて、アーティスト・日比野克彦が新潟県十日町市筋平の集落の住民たちと共に朝顔を育てるかたちで始まったプロジェクト。当時、「ワークショップ」や「アート」という言葉に触れる機会の少なかった集落住民との会話が途切れかけたとき、日比野はふと目にした花壇のことを話題に出したところ会話が弾みはじめ、共に朝顔を育てることになった。

2005年水戸での日比野の個展を機に初めて朝顔の種が運ばれ、翌年に福岡や太宰府、岐阜、そして全国各地へと広がった。朝顔の種が人と人、人と地域、地域と地域とが繋がる大きなネットワークの橋渡しどなっている。

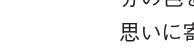


04 子どもが動いた!いつもと違う一日 みんなで日本画を描いてみよう

初めて出会った岩絵の具
自慢のTシャツ完成!



1.間近に朝顔を見ながらのデッサン 2.朝顔を観察する子どもと講師 3.色を選びながらTシャツ制作



02 すごいね!日本刀って 紙の日本刀を作ろう

参加した小学生は、目の前で本物の日本刀が分解され、鞘や鐔等を紹介する講師の手元を見ながら、解説を熱心に聞き入っていました。会場の美術館に展示してある刀身の鑑賞や紙の日本刀制作体験を通して、美術への入口を広げていこうとする講師の思いが伝わってきました。



03 ライオン、鶏、象それとも白鳥?@動物の謝肉祭 演劇×音楽×ダンス!?

スペシャルワークショップ

「いつもと違う表現って楽しいと感じよう!」。講師である舞台女優とピアニストからの言葉によって、小中学生は次第に身体を使って自分を表現することに慣れていきます。動物の謝肉祭のピアノ演奏に合わせて生き生きと動物に扮す子どもの姿が見られました。

1.ピアノの音色や音の大小に合わせた身体表現 2.グループごとに動物を表現 3.身体を動かすことや、思い思いの表現に挑戦





茅ヶ崎市美術館 企画展「美術館まで(から)つづく道」

フィールドワークショップ 「みちの音を摘み取る」

近年増加している先端的なテクノロジーを取り入れた子ども対象のアートプログラムには、どのような効果があるのかを事例調査するため茅ヶ崎市美術館にて開催されたワークショップを参観しました。

企画展「美術館まで(から)つづく道」では、インクルーシブデザインの手法を用いたフィールドワークの体験をもとに、表現者が視覚、聴覚、触覚、嗅覚などあらゆる感覚を用いて鑑賞する新たな作品が展開されました。展示作品の一つである『音鈴』は、聴覚障害のある方と、茅ヶ崎の道を歩いたフィールドワークをもとに制作され、茅ヶ崎の音が記録された短冊を揺らすと様々な音が響く作品です。その関連イベントとして開催されたワークショップでは、参加者が実際にフィールドワークで音を摘み取り、それが作品となりました。

テクノロジーの手法を用いたアートプログラムの実例として、音を、聴覚に加え視覚や触覚でとらえることで、気づかなかった音が聴こえ、身体全体の感覚が呼び起こされることが実感できたワークショップでした。

開催
概要

日 時] 2019.8/11(日)14:00~16:00

会場】茅ヶ崎市美術館 アトリエ及び屋外

講 師] 金箱淳一(メディアアーティスト／神戸芸術工科大学助教)
原田智弘(音空間デザイナー／ソラソレ堂)

対象] 小学生以上

参加費】無料

主催】公益財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団



の動画
岐市美術
itterより

を鑑賞する

制作者で今回の講師であるお二人から
品『音鈴』を鑑賞し、触れることのできる



音が記憶された

み取る



03 摘み取った音 作品にする

摘み取った音を確認し、短冊に記録する音を選びます。その音は、展示中の作品『音鈴』の短冊に記録されました。



04 「音鈴」を聴く 共有する

自分の摘み取った
が『音鈴』となり、
加者全員で鑑賞
冊に風を送ると、
それが摘み取った
が鳴り響きました。





こどもアートワークショップ×カンファレンス こどもとアートをつなぐ ワークショップとは

子どもも大人もワークショップを体験し、考えたこと、感じたこと、気になったことを語り合う対話型のカンファレンスに参加しました。

一般的に私たちが知るカンファレンスと異なり、ここでは子どもも障害のある方も自由に参加できるフリートークの時間として設定しました。主催者の意図は、「アートやワークショップの振り返りや評価を知るために参加者の生の言葉を交流させる」ことです。

私たちの研究会でもしばしば課題に挙がるのは、アートプログラムの評価につながる効果をどのように見出せば良いかということです。主催者の意図に共感しながら参加者は対話を深めていきました。

開催概要

[日時]
2019.8/5(日) 13:00~18:30

[会場]
鴨江アートセンター 301

[参加アーティスト]
仙石彬人、TEN-TO(柏原崇之)
BOB ho-ho(ウエダトモミ・ホシノマサハル)、ami

[ゲスト]
滝村陽子(こども芸術教室Kidz Lab 代表)
尾見紀佐子(マザーディクショナリー 代表)
山本祐輔(静岡大学情報学部講師 情報学博士)

[主催]
こどもアートスタジオプロジェクト

[助成]
子どもゆめ基金助成活動

13:00~ まずはアートワークショップの体験です。
用意されたのは3組のアーティストによる3種類のワークショップです。



**プリンタブル/
シルクスクリーンプリントを使って
(BOB ho-ho + ami)**

幾何学模様、記号などのシルクスクリーン版を使って自由にプリントします。カラフルなインクと、布、紙、木、いろいろな素材に擦りながら次々とアイディアが広がっていきます。



**ヴィジュアル・リミックス・
レコード(仙石彬人)**

子どもたちが初めて出会ったレコード盤面に絵を描いたり、シールを貼ったりして飾ります。完成したら聴いてみます。クルクル回る絵と流れてくる不思議な音楽によって視覚と聴覚を通して楽しめます。

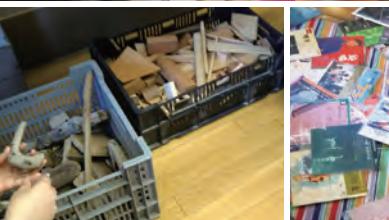
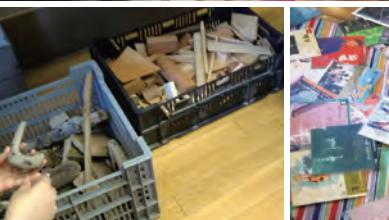


**漂流物と木材を
使ったワーク(TEN-TO)**

プラスチックや流木や木材など、素材の宝物の中から自分で選んだ素材を切ったり、つけたり、組み合わせたり。作り続けていると出来上がりの姿がどんどん変わっていきます。本格的な工具も使いました。



ワークショップの場所、それを飾れる場所、話せる場所、自由に過ごせる場所の空間構成によって子どもたちのイメージが沸き上がります。



アーティストが用意したユニークな素材に子どもも大人もワクワクしました。

15:30~

**アーティストと参加者による
カンファレンスが始まりました。**

作りたい人は作りながら参加です。

同じ体験でも個々に感じることが異なるアートワークショップの多様さが、参加者の言葉や態度から読み取れます。読み取ったそれぞれの意見を集めると何らかの効果が見えてくるかもしれません。私たちもすべてに参加し、子どもから大人までの主体性について考察する機会となりました。

主体性を生み、育むにはどのような環境であれば良いのか?それは「自由であること、互いを認め合う寛容性と尊厳、ひらめきや悩みへの共感を感じ取れる場に主体性が生まれるのではないか?」などが語られました。今後も、考察と観察は続きます。



アーティストやサポートスタッフは作り方を教えていません。参加者の様子を観て手を差し伸べ、言葉をかけています。





みんなでつくる“ひとつの舞台”のようなワークショップ

ワークショップサークス

浜松市北部にある引佐多目的研修センター内のホールにて、6組のアーティストたちのワークショップが展開されました。

ホールに足を踏み入れると、会場は薄暗く、所々に柔らかなスポットが当たっています。参加者はその灯りを頼りに「何があるのか?」探すように歩きます。暗がりに目が慣れ、ワークショップ毎に用意された素材が見えると、作りたい気持ちが沸き上がります。作っている時は参加者の自由な時間です。つくることに困ったときにはアーティストやサポートスタッフと一緒に考えてください。

参加者のつくりたい気持ちがのびのびと想像の世界を広げていました。

開催概要

[日時] 2019.11.17(日) 10:00~17:00

[会場] 引佐多目的研修センター 多目的ホール

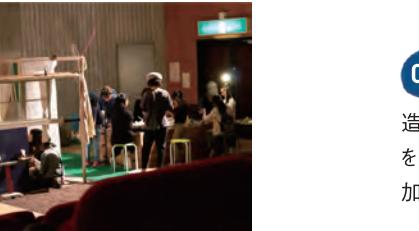
[対象] 子どもから大人まで [主催] こどもアートスタジオプロジェクト

[助成] 子どもゆめ基金助成活動



01 空間づくり

薄暗い会場には、物語を連想させるような設営物や展示作品、什器が置かれており、参加者のイメージを広げるきっかけとなりました。



03 音との関係

時間が経つにつれてこの空間での楽しみ方が分かるようになると、子どもも大人も個々に、好きなワークショップへ出掛け、また次に動く流れが生まれていきました。それは誰かに規制や強制される動きではありません。ワークショップサークスでの時間が心地良く感じられました。

04 アーティスト

参加者に対するアーティストのさりげないアプローチは、参加者の自由を尊重してくれていると感じました。どんな作品でも認めてくれるまなざしがあり、多様な表現について学ぶ機会となりました。



02 参加者たち

時間が経つにつれてこの空間での楽しみ方が分かるようになると、子どもも大人も個々に、好きなワークショップへ出掛け、また次に動く流れが生まれていきました。それは誰かに規制や強制される動きではありません。ワークショップサークスでの時間が心地良く感じられました。

05 ワークショップ

イベント当日に行われたワークショップ。



音あそび 音あつめ [吉田朝麻、NOBLUE]

懐かしく愛らしい玩具から出る音や、会場内の音を集めたり、電子楽器で音を作ったり、様々な音に出会い、組み合わせて音楽を作ります。



06 これから

これからの課題

こどもアートスタジオプロジェクトでは、サークスのように子どもや大人が暮らす地域へ出掛け、アートワークショップに誰でも参加できる機会として「ワークショップサークス」を開展していきたいと願っています。都市中心部のアートプログラムの参加者と、引佐多目的研修センターの参加者の観察から、アートプログラムの内容の充実に加え、継続的な機会を提供していくことも課題です。



布と影でつくる人形 [とづかゅう]

とづかさんが選んだ材料と、だれかの家の様な空間で人形を作ります。家の住人や来訪者を想像して作っている様でした。飾ってみると影が浮き出て生きているようです。



ライブステージ [サカベタクミ]



工作あそび [すずし]

身近なガチャガチャやアルミ缶などを素材にします。ガチャガチャを光させて動かしたいとか、アルミ缶を真っ平にしたいとか、参加者の小さな欲望が満たされています。



ウヨウヨ描いて フワフワさせよう [スサイタカコ]

大きなシートに思いつくまま絵を描きます。異なる絵は、スサイさんがシートから切り出して、空中に浮かぶ一つの作品になりました。



幾何学ドローイング [溝田亜美]



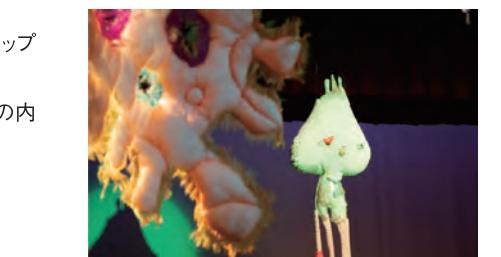
幾何学ドローイング [溝田亜美]

繊細で細かなドローイングを、舞台の上で描きます。他のワークショップを俯瞰しながらそのイメージをドローイングに落とし込んだり、舞台の上で演者になったのか、華やかなドローイングを描いていました。



凸凹積み木 [BOB ho-ho (ウエダトモミ、ホシノマサハル)]

用意された木材は、色が付いていたり、形の違う長方形です。これで積み木を作ります。ヤスリを掛けたり、色を付けたり、積み木のパーツが接着されて小さなオブジェになりました。



NEW CREATIVE VIEW

神戸芸術工科大学の金箱助教からは、新しいテクノロジーやアートを活用した「ものづくり」「人材育成」について、KIITOではデザインを活用した「まちづくり」について紹介していただきました。両者の活動とも、人々の創造力を育むことを大切にしています。この視察を通して私たちは、次世代を生きる子どもたちが身につけるべき創造力について考える機会を得ました。

金箱研究室訪問

感覚の想像力をひろげ
創造力を生み出すことへ

2019.12/6(金)

メディアアーティスト、神戸芸術工科大学助教 金箱淳一氏の研究室を訪問しました。

メディアアートは、コンピューターや電子機器などを活用した芸術です。私たちがメディアアートを鑑賞する機会はまだ少ないですが、多くの可能性を持ったアートの領域です。急速に進んだテクノロジーにより私たちの暮らしや行動も変わりつつあります。金箱研究室では、アートと子どもをつなぐ新しい媒体としてメディアを取り入れたプログラムの可能性やテクノロジーによる社会環境の変化の中で育つ子どもたちに向ける体験とは何か?についてお話をいただきました。

金箱 淳一

1984年長野県 北佐久郡浅科村(現:佐久市)生まれの楽器インターフェース研究者 / Haptic Designer, 博士(感性科学)。

情報科学芸術大学院大学(IAMAS)修了後、玩具会社の企画、女子美術大学助手、慶應義塾大学大学院研究員、産業技術大学院大学助教を経て、現在は神戸芸術工科大学助教。

障害の有無にかかわらず、共に音楽を楽しむためのインターフェース「共遊楽器(造語)」を研究している。

Junichi Kanebako <http://www.kanejun.com/>



音を聞くものから利くものへ、採取した音が振動で伝わる「タッチ・ザ・サウンドピクニック」。



感触の体験



1.「触覚」のデザイン分野 HAFTIC DESIGNについて教えていただきました。
2.同じように見えますが、触覚は違います。



人と人をつなぐインターフェイスとしての楽器「マウンテンギター」は、奏者が体を動かすことによって音が出ます。奏者、聞き手の相互作用=インタラクションで音づくり、曲づくりができます。

子どものワークショップでは参加者の斬新な意見から次の展開が見えて来ることもあります。新しいものづくりには発想が大切ですが、次に繋げるために自分で何度もプロトタイプをつくり挑戦します。想像(イマジネーション)→創造(クリエイション)→想像→創造の循環をつくりたいですね。人間には創造力が必要です。



デザイン・クリエイティブセンター神戸 KIITO

創造的思考を育み
交わり 発信する

2019.12/6(金)

神戸市の旧神戸生糸検査所を改修し、ユネスコ創造都市ネットワーク「デザイン都市・神戸」の創造と交流の拠点として2012年に開館したデザイン・クリエイティブセンター神戸(KIITO)を訪問し、取り組まれている様々な事例を紹介していただきました。

「+クリエイティブ」をキーワードに、アートやデザインの持つ既成概念にとらわれない自由な視点で、多様な立場の人々の交流から生まれるアイデアや工夫を取り入れ、身の周りの社会的な問題の解決に繋がるプロジェクトを数多く実践しています。KIITOのプロジェクトで取り上げるテーマは、子ども、高齢社会、防災、食、ものづくりなど、私たちの日々の生活に密接なものが多く、その日常にアートやデザインの力を活かしていくという取り組みは、次世代を担う子どもたちを育していく上で重要な視点であると感じました。

デザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO)

兵庫県神戸市中央区小野浜町1-4

開館時間/9:00~21:00

休館日/月曜日(祝日、振替休日の場合はその翌日)

年始年末(12/29~1/3)

<http://kiito.jp/>

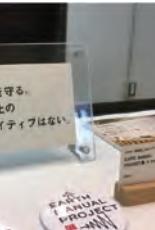


生糸検査所をリノベーションし、新たな価値を生み出す創造拠点となっています。

興味深いお話が
盛りだくさん



子どもたちが、シェフや建築家、デザイナーなど多くのクリエイターから本物を学び、お店づくりや仕事体験をする「ちびっこうべ」でつくられたクレープやさん。



世界各地のクリエイティビティあふれる防災活動を発信する「EARTH MANUAL PROJECT」。

KIITOの季刊誌
NEWSLETTER

ホールやギャラリーなどのレンタルスペースのほか、クリエイティブなフィールドで活動する人々が集うオフィス入居スペースやカフェも。



おわりに

日常生活にアートの視点が加わることで、子どもはどう変わるのかについて探究するために、この1年間様々な取り組みを参観してきました。アートと地域が作用しあう様々な事例に出会うことによって、「アート・子ども・地域」の重なりを意識した取り組みが社会の中に根づいていくことが大切であると、改めて気づかされました。

地域で開催されているアートプログラムでは、未就学児から大人までが何時間もの間夢中になって遊ぶ姿に、多くの人の心をとらえるアートの魅力を改めて感じました。また、「ふじのくに子ども芸術大学」では、アートに出会うことによって子どもたちにどんなことを感じてもらいたいか、講師の思いや意図などに触れることができました。



研究メンバー

21世紀を生きる子どもの生活は、最先端のテクノロジーなしには考えられません。テクノロジーとの関わり方も今後のアートの視点として重要な位置を占めるはずです。「音を見る」「音をまとう」「音に触れる」など音を五感で捉えるメディアアートの試みに出会い、アートプログラムも時代の流れに対応した変化と進化が求められていることを認識しました。

これからも、地域の人や文化とのつながりを大切にしながら、具体的なプログラムの検討や実践を重ね、アートの視点やアート思考を活かした未来の人づくりを応援する活動を続けていきたいと思います。



藤田 雅也

静岡県立大学短期大学部こども学科
准教授

愛知県公立中学校美術科教諭、名古屋経済大学短期大学部保育科専任講師・准教授を経て、2016年より現職。現在は、一般社団法人日本美術教育学会理事、全国大学造形美術教育教員養成協議会委員、豊田市文化芸術振興委員会委員などを務めている。研究テーマは、触覚と表現行為の関係、乳幼児の造形遊び、美術鑑賞教育。主な著書(共著)に、『美術教育概論(新訂版)』(日本文教出版)、『造形表現・図画工作[第2版]』(建帛社)、『幼児造形の基礎』(萌文書林)などがある。

執筆担当 ▶ P.2~6



坂田 芳乃

アルテ・プラーサ
会長

元静岡県立美術館副館長。県立美術館在職中に、県内全小学生に本物の芸術に触れる機会を提供する「キッズアートプロジェクトしづおか事業」創設。2018年、アートと地域をつなぐことを目的に「アルテ・プラーサ」を設立。「アートと子どもの取り組み」「アートと地域のコーディネート活動」等に取り組んでいる。

執筆担当 ▶ P.7~8, 17



青木 明子

こどもアートスタジオプロジェクト主宰
アートコーディネーター

大学卒業後、ゼネコンのプロジェクトで美術館の設立、運営管理を担当。アートマネジメントを学び2006年から「こどもアートスタジオプロジェクト」を主宰。行政の助成事業選定委員、文化振興ビジョン策定委員などを経験。2013年11月にオープンした浜松市鴨江アートセンターの立上げ、企画運営に従事。現在はフリーで地域とアートをつなぐ活動を続けている。

執筆担当 ▶ P.11~15



齋藤 緑

公益財団法人静岡県文化財団
総務課文化情報グループチーフスタッフ

2006年より静岡県文化財団勤務。これまで、グランシップ主催事業の企画運営、子どもたちに向けたアウトリーチ等の教育普及事業、アーティストや文化施設職員の人材育成研修等を担当。現在、文化活動の中間支援をおこなう「ふじのくに文化情報センター」にて県内の文化団体の活動支援や交流事業に従事している。

執筆担当 ▶ P.9~10, 16



『あしたの子どもたちへ ~アートとともに~』

2020年3月1日発行

監修：藤田雅也

編集・執筆：藤田雅也、坂田芳乃、青木明子、齋藤緑

協力：長崎ばんばん保育園、ふじのくに子ども芸術大学、こどもアートスタジオプロジェクト、茅ヶ崎市美術館
神戸芸術工科大学金箱研究室、デザイン・クリエイティブセンター神戸(KIITO)

デザイン：安達彩夏(design hotori)

発行：静岡県立大学 短期大学部こども学科 藤田雅也研究室
〒422-8021 静岡県静岡市駿河区小鹿2-2-1 E-mail : fujita@u-shizuoka-ken.ac.jp

※本報告書は、令和元年度教員特別研究推進費(静岡県立大学)の助成を受けて発行しています。